

高等教育の被服造形実習における 基礎段階のあり方に関する一考察

内田 直子

UCHIDA Naoko

被服造形実習における、高校までの経験の実態と、短期大学で学んだことに関する満足度や技術の理解度を調査し、短期大学での被服造形実習の基礎段階の学習のあり方と今後の方向性を検討した。調査方法は、1年次の履修者に質問紙法によるアンケート調査を学習初回の4月と1年次最終回の1月に実施した。その結果、中等教育では簡易な被服製作や手芸が多く、取り扱われた種類も多様であった。短期大学で1年間実習を学んだ学生の達成感、満足感、充実感はいずれも80～90%を示した。しかし、技術の理解については、すべて一人で完璧にわかっているとは言い難い。このことから、被服造形実習の基礎段階においては、高校までの基礎部分を導入しながら、常に理解のフィードバック、並行して課題製作過程の節目毎に達成感を味わえる仕組みが必要であると思われる。

キーワード：被服造形実習、基礎段階、技術理解、達成感

1. はじめに

本学家政学科ファッション専攻では、造形領域の学習科目として「ファッション造形実習」¹⁾をⅠ、Ⅱ、Ⅲと段階を追って履修するようにカリキュラムを組み(Ⅰは1年次前期、Ⅱは1年次後期、Ⅲは2年次前期に開講)、このうち、必修科目は「ファッション造形実習Ⅰ」のみ、それ以降は選択科目としている。ただし、専攻で示している履修プランの「ファッションクリエイト系」の科目を修めたい者は、「ファッション造形実習Ⅱ」を「原則として履修する科目」としており、履修プランの「販売・コーディネート系」の科目を修めたい者にも「履修するほうが望ましい科目」として位置づけている。この他に、(社)衣料管理協会の衣料管理士の資格取得希望者には「ファッション造形実習Ⅱ」は必要科目となるため、事実上「ファッション造形実習Ⅱ」までは多くの学生が履修する状況にある。

上記のカリキュラムでの位置づけや資格取得科目と

しての状況を考慮し、具体的な実習課題として、「ファッション造形実習Ⅰ」では、基礎縫い、基礎ブラウス、裏地付きスカート、「ファッション造形実習Ⅱ」では、ワンピース、簡易パンツを設定している。

このような状況下で、履修学生の高校時代の家庭科は、「家庭基礎」「家庭総合」「生活技術」の3科目のどれかを履修すればよいという選択の幅があり、学生の高等教育機関入学前までの家庭科等での実習経験は、結果的に出身高校や出身科によって履修した科目の内容や取り扱う教材などによって多様となっている。これと並行して、近年の学習指導要領にみる被服領域は、実習課題の簡易化、軽減化の傾向がみられる。²⁾

このため、大学生の技能と被服製作体験の関連性³⁾や被服製作に対する意識と縫製技術習得の実態⁴⁾、製作時における巧緻性について⁵⁾などの研究があり、他学でも平易化した内容の中等教育を経た学生における、高等教育での製作実習のあり方について、常に検討がなされている。

本稿では、特に著者が担当している「ファッション

造形実習Ⅰ、Ⅱ」の履修者の短期大学入学までに受けて来た中等教育の実態や、短期大学の授業においての意識調査等から、高等教育の実習における基礎段階のあり方を検討し、今後の方向性を検討したい。

2. 方法

2.1 調査対象及び時期

調査対象者は、実習の受講前調査を「ファッション造形実習Ⅰ」の履修者31名に対して2008年4月に実施し、同じく1年間の受講後調査を「ファッション造形実習Ⅱ」の履修者25名に対して2009年1月に実施した。

2.2 調査内容

受講前調査の内容は、(1)中学生、高校生時に製作したもの、(2)授業への希望、(3)1年次後期開講の「ファッション造形実習Ⅱ」の履修希望の有無についてである。

受講後調査の内容は、(1)入学する前の実習の経験度、(2)技術の向上度、(3)履修後の達成感、満足感、充実感、苦勞の度合い、(4)部分縫いの理解度、(5)2年次前期開講の「ファッション造形実習Ⅲ」の履修希望の有無についてである。

2.3 調査方法

調査は質問紙法を用い、質問項目は選択式と自由記述式を併用した。また、受講前と1年後の受講後の同一人の変化をみるため、学籍番号を整理番号として記させた。回収率は100%である。

3. 結果 および 考察

3.1 中学生・高校生時に製作したもの

中学生・高校生時に製作した作品として、覚えている限り全て列挙させ、記述のあったものを人数別にまとめたのが表1である。中学生時は、「エプロン」「カバン」などが主流であり、過去の教育課程にあった「ズボン・パンツ」は3件、「スカート」は1件、この他着装するものとして「浴衣」1件であった。このうち、「スカート」「浴衣」は同一回答者であったため、31名中4名にあたる12.9%が、現代の中学生としては比較的難易度の高い作品を製作していた。

高校生時においてようやく「ズボン・パンツ」、「ス

カート」が取り扱われ、その他の作品種類も多様である。実際、個別回答をみると、被服系高校出身であるといろいろな作品に取り組んでいるが、普通科高校出身では家庭科担当教諭の得意分野や学校のカリキュラム構成などの都合で、被服作りのところもあれば、手芸などで終わるところもあり、実に多種多様である。

以上の結果より、「ファッション造形実習Ⅰ」という本専攻での基礎段階では、この様々な背景をもった学生が履修していることになる。

表1 中学生、高校生時の製作品一覧

中学生時		高校生時	
作品名	件数	作品名	件数
エプロン	11	スポン、パンツ	10
カバン、巾着など	10	エプロン	6
人形、おもちゃ	4	スカート	6
お弁当袋	4	カバン、巾着など	6
スポン、パンツ	3	浴衣	4
クッション	3	じんべい	4
三角巾	1	人形、おもちゃなど	3
スカート	1	マフラー	3
浴衣	1	ブラウス	2
シューズ入れ	1	シャツ	2
テーブルクロス	1	チャイナドレス	2
座布団カバー	1	ドレス	2
縫いの練習	1	刺繍	2
※実習経験なし	1	手袋	1
複数回答あり		パジャマ	1
		Tシャツ	1
		ベスト	1
		さしこ	1
		トップス	1
		ワンピース	1
		タンクトップ	1
		ジャケット	1
		女児服	1
		スーツ	1
		刺繍クッション	1
		帽子	1
		テッシュカバー	1
		三角巾	1
		お弁当袋	1
		赤ちゃんの肌着	1
		はっぴ	1
		※実習経験なし	2
		複数回答あり	

3.2 短期大学での授業への希望

自由記述であったが48.4%の者が記述した。その内容は表2のとおりである。高校時の豊富な実習経験から積極的に取り組みたい者、経験はないが前向きに取り組みたいと思っている者、逆に、ほとんど経験がないためこれからすることに不安を感じている者、または経験したことによって苦手意識がある者、と前向きに捉えている者と気後れしている者とに大きく二分されている傾向がある。

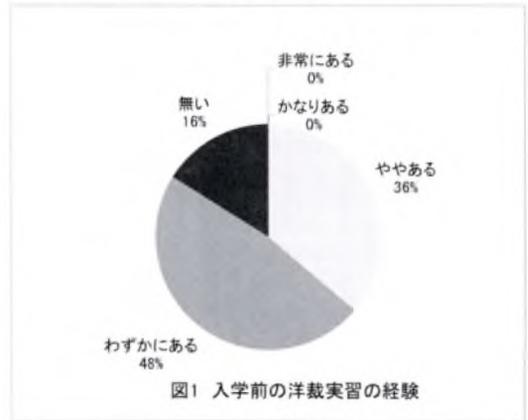
表2 授業への希望

いろいろなものを作りたい。
高校の時間がすごく楽しかったので、楽しくやりたい。
普段にも着られる服もつくってみたい。
できるだけ多くの作品を作りたい自分で着られる服。
とにかく最低限のことはできるようにしたい。(出来るようになります) 楽しい授業になればいいと思う。
型紙などの書き方をしっかり学びたい。
自分の技術を磨きたい。
今のところ造形の方は希望していない。けれど、習っておきたい。
知識がほとんどないので、基礎からしっかり学んでいきたい。
縫い物とかミシンが苦手なので、ゆっくり進めて欲しい。
中学、高校と全くミシンを使う機会がなかったので、わかりやすく教えてほしい。
ゆっくり学びたい。
わかりやすく教えて欲しい。
縫ったりするのが大の苦手である。高校の時から失敗したりした。なのでもっと上手になりたいと思っている。デザインは前から得意で、楽しみである。少しは上達できるように頑張りたい。
裁縫は嫌いではないが本当に不得意だ。みんなについていけるように努力します。頑張る気はあります。

3.3 入学する前の実習経験について

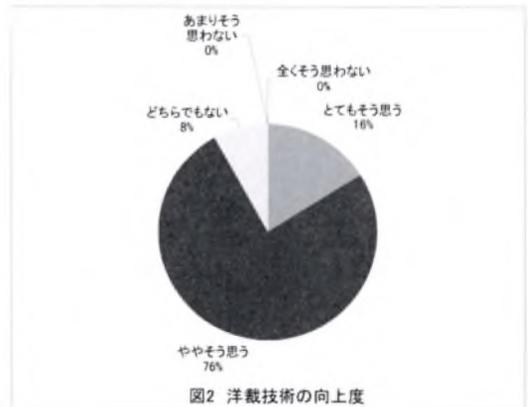
1年次の「ファッション造形実習Ⅱ」を終えた時点で、1年間の学習成果を再認識させるために、改めて入学する前の「洋裁の実習の経験」について「非常にある」「か

なりある」「ややある」「わずかにある」「無い」のどれであるかを自己申告の形で問うたところ、図1に示すように「わずかにある」48%、「ややある」36%と、多少の経験があると思っている者は84%、「無い」16%で、高校時代に数多く取り組んできた学生でも、「かなりある」という認識は持っていない結果であった。



3.4 洋裁技術の向上度

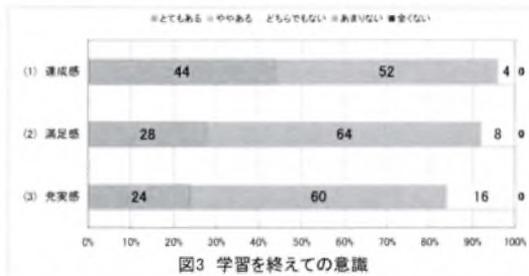
3.3の調査結果を踏まえ、「短大に入学した頃に比べ、では現在、洋裁の技術が向上したと思うか」を「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5段階評価で尋ねた。結果は図2に示すように、「とてもそう思う」16%、「ややそう思う」76%と、92%の者が多少なりとも向上したことを意識している。特に、入学する前に実習経験の「無い」16%は、全員「ややそう思う」と回答している。



3.5 学習を終えての達成感等の意識

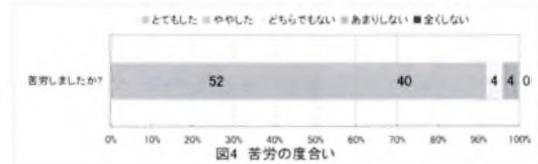
「ファッション造形実習Ⅱ」を終えた時点で達成感、満足感、充実感がどうであったか、「とてもある」「ややある」「どちらでもない」「あまりない」「全くない」の5段階評価で尋ねた。結果は図3に示すとおり、達成感、満足感、充実感とはともに、「あまりない」「全くない」と回答した者はなく、「とてもある」「ややある」と肯定的な回答した結果を合算すると96%、92%、84%となり、全体的に多くの学生がこれらの感情を肯定的に抱いている。特に達成感、この3つのうちで「とてもある」の評価が高く、課題を仕上げることによって、この感情が培われていったと思われる。

ただし、充実感は「どちらでもない」16%とこの値が達成感や満足感の結果より高かった。この回答をした者は技術の向上が「どちらでもない」、または、満足感が「どちらでもない」などと回答した者にみられたことから、充実感というものは、学習時間に対してかけた労力が見合っていたか、負担だったか、などに左右されるのではないかと推察される。



さらに「製作をしていく上で苦労したか」について、「とてもした」「ややした」「どちらでもない」「あまりしない」「全くしない」の5段階評価で尋ねた。その結果、図4に示すとおり「とてもした」52%と過半数以上の者がとても苦労を感じており、「ややした」42%を含めると、92%と大半の者はなんらかの苦労を感じていた。しかし、一方で「あまりしない」「どちらでもない」と回答した者もあり、この回答者は個別データでみると高校の時に比較的多くの作品を仕上げている者であった。そのため高校からの学習が短期大学で復習となっているため、未経験者より苦労は感じなかったであろう。

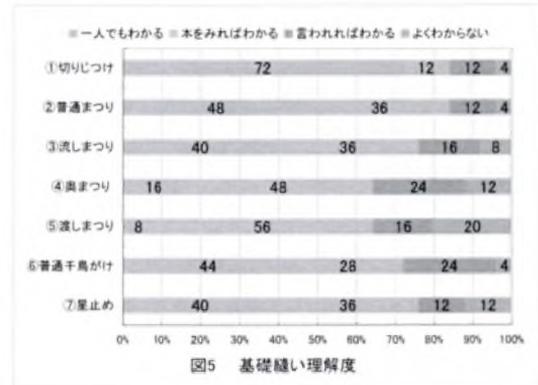
以上から、今まであまり実習経験がないことが、この苦労と結びつき、その結果、課題作品を仕上げた時は、その気持ちが達成感として昇華され、この達成感の評価が高くなったのではないかとと思われる。



3.6 学習した基礎縫いの理解度について

「ファッション造形実習Ⅰ」の最初の課題として学習した基礎的な縫い方について、1年間経過した今、どの程度理解しているかを自己採点として評価してもらった。その結果が図5である。何回も実習中に出てくるものは「一人でもわかる」であるが、1、2回程度しか使わない縫い方は、一人で出来るものは少なく、大半は本を見るか、人に縫い方のヒントを言われて思い出す結果となった。

本来なら、この時点でどの学生も一人でわかるが一番望ましい結果であるが、そのようになっていない現状を改善するためには、後期の最初や半ばに実技確認をするなどで、マスターした技術を常にフィードバックさせ、記憶に定着させることが必要であると思われる。



3.7 上位段階科目への履修希望率とその実際

受講前調査で「ファッション造形実習Ⅰの後、ファッション造形実習Ⅱを履修したいか」を聞いたところ、「履修を考えている」は71.0%、「履修を考えていない」は3.2%、「まだわからない」は25.8%の結果であった。

その後、実際に「ファッション造形実習Ⅱ」を履修した者は80.6%で、このうち、最初から履修を考えて実際履修した者は58.1%、履修を考えていない、またはまだわからないとしながら、結果的に履修した者は22.6%

であった。履修するかわからないとしても、受講した授業での体験や自信から積極的に取り組もうと考えている者、または資格取得への意欲から見いだされる必要性等で、最初は苦手意識のある学生も、授業での成功体験や科目の必要性を認識させていくことにより、関心を十分持たせられる可能性があることが伺える。

ただ、逆に希望していても結局履修しなかった学生も12.9%おり、この学生たちは上記の成功体験が見いだせなかったように思われる。このような学生が一人でも少なくなるよう、毎回の進捗の中での達成感を感じさせる方法、例えば、毎回、達成したことを視覚化するなど、今後より検討していきたい。

さらに、この「ファッション造形実習Ⅱ」を履修した者(25名)のうち、2年次の「ファッション造形実習Ⅲ」の「履修を考えている」とした者は88.0%であった。実際の履修の有無は新年度にならないとわからないが、少なくとも意識の上では、「ファッション造形実習Ⅰ」の時に「ファッション造形実習Ⅱ」の履修希望が71.0%であったことと比較すると、学習経験の深さと期間の長さが、明確に次の段階に向かわせる原動力になっていると思われる。

4. ま と め

本稿は、短期大学の被服の造形実習の基礎段階において、学生のそれまでの学習経験の実態と短期大学で学んだことよって感じた満足度などや、技術の理解度について調査した。その結果、中学生時に製作したのは「エプロン」や「カバン」、高校生時では「ズボン・パンツ」「スカート」とある一方で、簡易な被服や手芸といったものも多く、全般に扱われた種類は多様であり、中には実習の経験が無い者もいる。

短期大学で1年間実習を学んだ学生の達成感、満足感、充実感、いずれも80-90%を示し、特に達成感に関しては、苦勞して取り組んだという意識と大きく関わっていると思われる。ただし、技術の理解度については、部分縫いを例にとると、関わる回数の少ないものは、記憶に定着しているとは言い難い。これは常にフィードバックさせる方法をとることが必要である。

以上から、被服造形実習の基礎段階においては、中等教育の復習および学習していない学生の対処を兼ね、中等教育でなされていたと思われる基礎部分を導入学習とし、その後は、常にフィードバックのシステム、並行して、課題製作過程の節目毎に達成感を味わえる

教育方法の検討が必要だと考える。

5. 注および参考文献

- (1) 平成21年度より「ファッション造形実習」は、「アパレル造形実習」に名称変更となる。
- (2) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 家庭編 平成17年一部補訂版、開隆堂、2006
- (3) 高森壽、福山理恵：教員養成学部学生における手縫い技能および被服の有効利用の実態と被服製作体験との関連性、熊本大学教育学部紀要、自然科学、50、pp. 79-88、2001
- (4) 田村 和子、西原 千代：大学生の被服製作に対する意識と縫製技術の習得、高知大学教育実践研究、(20)、pp. 33-40、2006
- (5) 西之園君子、中村民恵：女子短大生の被服製作に関する手指の巧緻性について、鹿児島純心女子短期大学研究紀要、第32号、pp. 83-92、2002

ピアスーパーバイザーからのコメント

教育実践研究での「基礎段階のあり方」は重要な研究対象と思われます。本論文は、まず幅広い見地から学生の短期大学入学前の諸要素から起こし、短期大学入学後の基礎、展開、総合と履修段階での役割・カリキュラム構成要素として研究対象に本授業を定め認識すると共に、資格取得のための実学であると定義して両義を満たすよう研究目標を定めています。特に、今回の考察は、調査対象の学生意識を統計の中でとらえ、技術理解、苦勞の度合い、達成感等の関係を追求し「常に理解のフィードバック」が可能な方法をメカニズムの中から確立しようとするもので、変化する学生意識の形態を捉えることの困難を超え、その経緯のなかにこそ学習の動機があると定め、結果、貴重な研究成果を得たと思われます。

(担当：北野正治)